THE JAPAN INTERIOR DESIGNERS' ASSOCIATION

JID no. 63

1974. Feb. 1　　昭和49年2月1日発行

目　次

主集・世界デザイン会議に出席して
明日へのあゆみ・尾上孝一…… 1
無用の用・勝瀬壮一・会議1 会議2・狩野雄一…… 2
HOSPITALITY COMMITTEE・坂田種男
若さのパワー・豊口克平…… 3
日本らしいハードな会議・中村圭介…… 4
人意と現実の難しさ・原　好輝
「人の心と物の世界」「物の心と人の世界」・広田長治郎…… 5
京都の秋・光藤俊夫…… 6
"力"の再認識・山口勇次郎・デザイン会議が残したもの・渡辺優…… 7
第4回目を迎える研究発表会・秋山修治・編集後記…… 8
賛助会員名簿・事務局からのお知らせ(会員移動)……別紙

明日へのあゆみ

—デザイン会議と協会の在り方—

尾上孝一

謹賀新年

今や，激動する社会にあって，昨年開催されたデザイン会議を主集とし，これらに参加された会員諸士の言葉をいただきました。それにもられた小さな隨想から，明日への大きな糧を汲みとってゆきたいもの。

思えば，産業優先の急先峰として全てのデザイン界が職能の花形として我が世の春を欧歌した。けだし，残されたものは，

真に，人にとってしあわせな豊かな生活とはなにか，のテーマであった。

今日，さけばれているモノ不足，エネルギー資源の不足は，まさに，モノそのものの存在意義を事問う重大な岐路にたっているともいえましょう。いわゆる，会議におけるヒトの心とモノの心の邂逅は，その根源に向ってそのあるべき姿が問いなおされているのでしょう。

かって，昭和43年の大阪大学の人間科学についての新学部創設の趣意書は，「人間の心理的，社会的行動と環境を研究する実証的諸科学と，人間の学習と教育を研究する教育学」との緊密な協力のもとに，「人間の行動と環境，および人間形成についての基礎的な研究をすすめる……」とうたっている。

これについて，当時の阪大総長岡田実氏は，つぎのような人間回帰への問題を提示している。

"科学技術文明が進めば進むほど重要になるのは，人間の問題だ。どんなに科学が進歩しても，人間不在では人類の幸福はない。人間の研究こそ，これからの人間にとって最大の使命である"。

けだし，名言といわざるを得まい。

一方では，デザインする即モノをつくるの単純なかつ貧困にも通じる短絡な発想論理を，もう一度みなおす時代に到達したのではないだろうか。

たとえば，今日の産業化社会のもっている弱味，換言すれば，エネルギー資源の有限から枯渇への警鐘。加えて世界にさきがけて産業化以後の社会に突入しているこの生活構造の変革を，デザインの世界からどう把握し発想してゆくべきかの問題も含めている。

まさに，これら時代の訴求する人間生活の存り方への不信こそ，たしかなるデザインの態様と理念とを組み上げるべき絶好な機会ではないのか。巷には，自国の安定のためにのみ平身低頭することがやゆ（揶揄）されているなど，ことここに至れば，もはや，地球的連帯の上で考えなければならないと。

すなわち，一人の存立よりも全体の安全をとらえるグローバルな発想が期待され熱望されている。

それは，産業化以後の社会に求められている人間精神の向上と豊かな交流に集約されてきているのである。

ここに，新しい年を迎える。

それは，同時に，より豊かなる明日への第一歩を印すとき。そして，ゆれ動く現代にあって，深き文化の伝統を継承しながら実りある未来を示唆し得る達見を見出すことは，まさに，明日の協会ひいてはデザインの胎動にあって焦眉の念を要する課題であろう。

ここに，新しい年の行動綱領を提言し，これら綱領の下に全協会的連帯をもって事業を計画・実践・運営し会員の力を収斂させてゆきたいもの。

提言　みんなでむすぼう
　　豊かなる語り合い
　　確かなるふれ合い。

終りに，会員皆様の益々の御健闘と協会活動への積極的な御参画を期待いたしております。

無用の用

勝瀬壮一

9年前の10月10日の世界オリンピック東京大会の開会式を思い出させられるような秋空がくれる頃，銀鐘繊維社長嵯峨君（東京高工芸同窓鐘紡社友）と京都につき。洛北の関西セミナーハウスに旅装をとき。早速京都ホテルの観迎パーテーに出席した。何しろ人また人で光の海の中で豊口克平，明石一男両君等と何にが何んだかわからない中に，開催された。

なにしろ始めての国際会議，なんとなく東洋流に考えて外国の方々に失礼ではなかったかと思えた。

翌11日メインホールで梅棹忠夫博士の基調講演で始められた。

『自然との調和で実に高度な“かたち”を作りあげた日本の農業からみれば今後人と自然と工業の美的調和の可能性が大いにあることを説きそれを受けもつデザイナーの洋々たる前途をたたえた。西欧から“精神なき模倣”をした日本文化の中身には八百万（やおよろず）の神々が宿り，姿は西欧だが内容は似て非なるものであるといい，魚には同類にしかみえない鯨が，内部構造は全く異質な動物であるのと同じだ，と強調。日本文化を鯨にみたてた同氏は，その思想を島崎藤村の“椰子の実”にたとえ波にただよう漂流の精神で，目的をもたず，衝突をさけ，その場しのぎの手直しをしてきた独特の美学だと規定した。その美学と異質の姿で私達の日常生活のいっさいとかかわり“マッチ棒から摩天樓まで”といわれるＩＤのあまりにも目的のみに突つ走るみにくさを指摘したのであろう。

それは今後のＩＤに“無用の用”のような高度の思想をいれよ』という提案でもあった。

シャツにアイロンでマークを転写し，売っている坂田氏

さて“無用の用”だが，今，昭和の始めに父の建てた家に長男夫妻が，昨年の12月に生れた孫娘をつれて，社宅の２ＤＫの３階から帰ってきた。

庭側の節なしのみがきのかかつた檜の広縁を歩行器で孫娘がスイスイ動きまわっている。日あたりは頗るよい。この広縁こそ“無用の用”だと思う。

この思想は，言葉の厚い壁は抜きがたいとしても外人には理解されないものと私は思う。私の席のうしろ狩野千葉大教授の隣の外人がしきりと漫画を書いて狩野君に見せていた。引き続き講演は英国の都市問題研究の権威コーリンブキャナン郷『変化ある社会とデザイン』と題して行われた。

講演をうけて後，自然，人間，文化，教育，などの分科会が開かれた。

デザインは心を表現するもの。そして新しい文化によって，豊かな人間世界を創造する。

企業も利潤追求優先から対社会的機能優先へ，新しい理念を視覚化，造型化して，生活者へ，等々。

宿命的に企業と結びつかざるをえない私達デザイナーは，その視点を終始企業に向け，その調和を語りながらも，消費者である一般人に向けるアプローチは，如何であったか？

２年後に，モスコー会議に出席して聞うと思う，事情がゆるされるなら妻もつれて行きたい。

会議１　会議２

狩野雄一

① 東西文明の相違（基調講演から）

我々日本の工業デザインが今まで先進国として受入れた欧米諸国が今では工業化の終了を予測し次の社会に生きる工業デザインの道を模索している時アジアの中心である東京ではじめて会議が開かれた意義は大きかった。

会議全体のテーマ「人の心と物の世界」をうたった梅棹京大教授の基調講演は最も注目をあびたものであった氏は西欧から「精神なき模倣」をした日本文明の中身には八百万（やをよろず）の神々が宿り，姿は西欧だが内容は似て非なるものであるといい動物学者らしく，このような日本文化をクジラにたとえ魚には同類にしかみえないが，その内部構造は全く異質な動物であるという論は大変興味ある主張であった。

ただ外国人には言葉の厚い壁もさることながら「神と物とをいっしょにする」という点で殆ど理解されず，むしろ，かなり反論があったようだ。要は東洋における汎神論的思想も西欧における一神論的思想の相違であろう。この基礎講演で梅棹氏は次に来るべき工業デザイナーの洋々たる前途をたたえ期待したのであるが，さて若いこれからの工業デザイナーがこれをどううけとめ，さらに具体的にどういうデザイン行動をし，デザイン姿勢に示すかむしろ大きな課題であろう。

もし裏目にでると大変な方向に進むことが考えられ，むしろうけとり方が心配になったのは私ばかりでないだろう。

② 発展途上国問題（デザインの南北問題）

分科会では発展途上国問題に出席したが，この問題については参加者には三つ分けられる。その一つはすでに工業デザイン開発し，その恩恵（?）に浴している。むしろ脱デザインを思考している先進国（欧米諸国）次はこれから工業デザインを積極的にとりいれようと望んでいる，いわゆる発展途上国（台湾・香港・韓国など）。もう一つは我が国のごとくすでに工業デザインにより発展の段階を経過し，むしろ今では物量による公害諸問題にぶつかっている国々である。そして皮肉にも，その日本が中間に入り，この発展途上国に直接にふれるようになるからである。

分科会ではこれら発展途上国のデザイン指導にはＩ．Ｃ．Ｓ．Ｉ．Ｄのスタッフが当るという意見が多く，その論議の中で指導うける側の国々から，それには我々の生活圏に位置する前進国の指導がデザインには欠くことができないという意見がかなり強く叫ばれた。

そうするとさし当り，わが国のデザイナー達が直接的にあたることになるかもしれない。そうなればどのような思考と方向とポリシーで指導，開発すべきか今後は大きな論議の対象になることであり，又このことが物量主義，開発の経験者として，経験国としての責務となるであろう。

HOSPITALITY COMMITTEE

坂田種男

第８回の世界インダストリアルデザイン会議には世界各国から集まりあの大きい京都会場も中は，人，人の波であった。私は一接遇委員として当協会から白石理事長，島崎信氏，加藤帛子氏がこれに参加し，もっぱら裏方をつとめる結果となった。当初考えられていた接遇方法もいろいろ変り，最終的に東京マップを作り，アイロンで出来るＩＣＳＩＤのマークシールを，Shopeに並べることになって，ＪＩＤＡ，ＪＩＤ，のメンバーそれに事務局の東島昌子氏を加えたメンバー８名で約半年かけてこれらの製作に殆んど毎週集まり夜12時頃までかけてこれらを編集，作成した。

接遇委員とは全くのサービス業務で主として，外国人の個々のインフォーメーションや会議場での通訳，相談，案内，ＩＣＳＩＤ・Shopeの売子，テクニカル・ツアーの受付け，そうして夜まで，全く24時間サービスであった。したがって会議場に出ていても一度もセッションに出られずわずか閉会式に参加しただけであった。レディースツァーにはまた加藤氏や東島氏が終日添乗していろいろと面倒を見られて我々のコミッティーの名前も，最初は，Welcoming Committeeであったのが会議の2日目からはHosptality Committeeとなり全く親切第一に外人会員と接することになった。したがって，もっぱら彼等の目を通した会議の感想を述べるとスウェーデン代表Mr. Sjoholmの話ではともかく出来すぎた会議というか成功裡に行事がはこばれすべてがタイムtoタイムで自分達はただ手を広げて口をポカント開けているだけですべてセットされ，会議中は何もすることがなかったという。フリーディスカッションでも余りにもスマートに流れている中に自分達の発言を控えてしまうような雰囲気になってしまったといっていた。

更に今度モスクワで開かれる第９回はこれ程にはならないと思うが，毎回大きくなるセルモニーに対して未来のビジョンを考えるより，我々の今日の仕事をどうしようかという話し合がちっともなされていない。インダストリアルデザイナーにとってもっとも大きな問題はそこに有るのだといっていた。そうして彼等の考えている何回か後のスェーデン会議のアイデアは先づコペンに集合して全員ボートに乗ってヘルシンキへ，そこで市街を見て，またボートでストックホルムへ，そうして船の中で会議を開催する。そんな案はどうかなどといっていた。

夜は京都で何を食べたい，それに合せてレストランを探してあげたり，わからないといけないと思って一緒に行って，ついでに６人前の勘定を払ったり，東京へ車で帰えるなら一緒に乗せてくれというので，京都から５時間東名を走って東京のホテルまで届けたり，東京へ帰って来たら他の代表が電話で誰に会いたい，彼に会いたいと，それぞれ会議が終っても何人かが朝から研究室をおとずれ二週間ばかり前やっとHosptlity Committeeから開放されたような次第，私もお祭は好きで余り苦にならなかったが余り会議が派手に大きくなるのも考えものだと思い，デザイナーとして静かに反省中です。

若さのパワー

豊口克平

難行が予想されたというよりも年寄りの心配が，ここ数年続いたが，開会１年ほど前漸く永野重雄氏を会長，司忠氏を副会長，新井真一氏を事業運営委員長，野見山勉氏を会議運営委員長にと御快諾を得て1973デザインイヤー運営会が正式発足した時点から，下部組織としての世界ＩＤ会議実行委員会は目ざましい活動に入ったわけであるが，栄久庵実行委員長ほか事務局，実行委員諸君の立案，宣伝，事務処理は

夜に日を継いで涙ぐましい努力の連続で，若さのパワー，成功への信念には驚異の一言につきる。

ＩＤ会議と呼称するものの会議の内容，ゲストスピーカーの講演，各分科会の議題に見られるように，その内容が今日の世界の国々の大きな悩みを真奥からぶちあげて語り合うべき＜人間＞＜社会＞＜自然＞＜文化＞を広く把えたところにデザイン，あるいはデザイナーの社会的な立場が拡大され，他の分野にあるものとしか考えられなかった人々に深く理解を得られたことを確信するのである。

政治家，行政者，企業家，人文，社会，自然科学者，技術者，芸術家，建築家など過去７回のＩＣＳＩＤ国際会議のうち，最も充実し，最も整然と，最も楽しく，最も多い参加者を動員したベストのものであったと広言できるであろう。

日本という地域で開催する特殊性はその企画において各国の興味と関心を呼ぶのには大変なことではあったが外国，特に西欧，東欧，ソ連，オーストラリア。近隣の台湾，韓国，中南米から数百の参加者のあったことは予想をはるかにこえる驚異であり，喜悦であった。（総会参加者 2,000 名余）

ブキャナン卿をはじめゲストの講演内容も立派なものであり，梅棹忠夫氏の基調講演の＜物に神が宿る＞日本思想の表現は如何にも東洋的，日本的思想として外国参加者にいたく感銘を与えたり，ぼう然と理解に苦しめたり興味深々たるものがあった。

また各分科会における欧米，日本その他の開発途上国の発言の特性が実に明確に異っていて，特に日本人の場合，その何れもが東洋的，日本的思考表現が共通した基盤に立っていた点など実に面白く感じられた。これこそ今後の人類発展への素晴しい反省と交流になること希ってやまない。

ＩＣＳＩＤ会長ビエノ氏の日本語の巧みな挨拶は満場を驚せもし，和気あいあいたる雰囲気をかもし出したが御本人はそのために２年間の日本語勉強を続けたそうでポケットに自分で作制した辞典をしのばせてどうだと見せていた。

こうした意味でこの会議はＪＩＤＡが主体となって準備，実行が進められたが，友好団体のインテリア・クラフトその他個人としてのメンバーの協力なしではこの成功は見られなかったもので，これを機会によりよき協力組織やパワーが生れることを希うものである。またイヤー事業として，募金に賛助された電機，自動車工業会などは別として，デザインと直接関係の少い，鉄鋼，銀行，電力，百貨店その他の団体の理解と厚意について文化国日本の歩みの音が聞えてきて何ともうれしい限りである。いろいろのアトラクションが行われたが，何れも日本芸能の粋を見せ，中でもフィナーレの太鼓陣は実に素晴しい人気を呼んだようである。

豊口氏と川崎氏

外人と話している加藤帛子さん（会員）
東島昌子さん（会員外協力）

日本らしいハードな会議

中村圭介

動くこともできないほど盛会なカクテルパーテーに始まった。この会議は，世界のＩ．Ｄ．デザイナーの定例のお祭りのように思えた。

好評だったバイコロシーの精神とは反対に，日本らしいハードな会議スケジュールで，多くのことが語られた。それは大変な量の情報であるにもかかわらず，それぞれの国の現状を理解するには，はなはだ不充分な時間であったようである。

従って，形態とか進化とか理念とかいった抽象的問題をテーマーとするところより開発途上国とか企業とデザインとか，具体的問題の中にそれぞれの国の現状がうきぼりにされていたように思う。

企業とデザインの分科会でのことである。ブラウン社や凸版印刷の方々などパネリストの方々が，企業とデザインの結びつきはどうあるべきか話し合われているとき，一人の発言者が“この会議は，いかにデザインをするかということよりも，現代社会でなにをデザインするか話し合うことが重要である。

電気鉛筆けずり器のようなあまり役に立たぬ物を開発するより，身体障害者や文盲をなくす研究をすべきではないか”との提案があり，会場に拍手がわいた。私はそこに，この会議の良心をかいま見たように思う。

また，政府のデザイン振興について話し合った分科会で，“進んだ国の政府が行なうデザイン振興策は物を作ったり評価することではなく，物を秩序立することで，日本の住宅は家具でうまっている。一企業ではできないモデュールの組織化など取りあげるべきだ”という私の発言に，

会議が終ってから，アメリカのMr. Mapshという人が，私の意見に同感だと，わざわざ私の後を追ってきてミーティングしたいと申し入れられた。

もともとこのような会議は全体の情況を理解することも重要であるが，こういうような友人を見つけだすところに本当の意義があるように思えた。

どこの国にも同じ考えを持つ人がたくさんおり，そこに現代社会の国際性を今更のように感じた。

人意と現実の難しさ

原　好輝

およそ人為的な現象のすべてが，その次元は別にして，デザインされたものといってしまえばそれ迄だが，会議そのものがデザインイヤーのクライマックスとして，見事にデザインされた典型といった印象が強かった。

物質的な氾濫による繁栄，その現代社会におけるインダストリアルデザインの位置付けを見るといった感じだった。経済的に急成長した日本で開かれた世界インダストリアルデザイン会議なればこそか。産業とそのデザインが持つ巨大なエネルギーは，内外からのデザイナー及びデザイン関係者による会議参加者が2,000人にも及び，そのスケールはかってない大規模なものになったと聞くが，メーンテーマである“人の心と物の世界”の持つ問題の深さを何か象徴的に表わしている様に思えた。

東洋で始めて開かれた会議でもあり，又，日本の伝統的なデザインの宝庫でもある古都・京都で行われた事えの関心が，参加者を一層多くした一因であると思われるが，反面，現代デザインが抱えている複雑な問題えの反省や模索といったデザインの本質を追求する問題解決に向かう姿勢が本来の目的であったはずだ。しかし，会議が盛会であればあるほど問題の本質や深こくさは消え，行事としての華やかさのみが表面にあふれ，個々の人の心をよせつけない数の力を感じさせる会議になってしまった様なきらいがある。30に及ぶ分科会は発言者だけでも120人以上にのぼり，明日のインダストリアルデザインの在るべき姿を模索する多くの意見を総括することなど，実際問題として出来るべきものではないが，個々に行われた分科会の内容の掘り下げについても余りにも多人数のため，突っ込みが出来ず時間切れという状況がままあった様だ。

基調講演で梅棹京大教授は，インダストリアルデザインは個々の目的追求のみにはしり，混沌と氾濫の社会をつくりだしていると指摘し，日本で開化した西洋文明は全く日本独自なものとして形づくられ，西洋文明とは似て非なるものであるとされ，高度の無用の用の思想こそ今後のインダストリアルデザインの道と述べられたが，現状の経済中心的な社会の中で，東洋的思想が受け入れられる土壌が果たして残されているのだろうか。現状の“人の心と物の世界”は余りにも程遠い世界である様だ。

資本・技術など企業の持つ経済力で計られ，押し進められている現状のインダストリアルデザインの世界，その中でデザイナーは一般大衆の生活にどの様に理想的な形でアプローチが出来るのか，今こそ人間の生活と環境を問い直すべき時だと思う。その意味では影響力が大きい会議だっただけに問題意識を残し模索を続けることに会議の持つ本来の意義を結び付けて行く事が必要であろう。又，大企業などを背影に強力な生産的基盤を持たない今迄のインテリアデザインの分野の長短など現実問題と合せ考えて見る時だとも思う。

いずれにしてもデザイナーの一人として，人意と現実の世界の難しさを会議に参加しより一層強くした。

「人の心と物の世界」「物の心と人の世界」

広田長治郎

三日間にわたる会議の多数の発言者の中で，私が一番強く印象に残ったのは，「物の心と人の世界」と題する梅棹忠夫京大教授の基調講演であった。この会議のテーマ「人の心と物の世界」の人と物を置替えた訳である。同教授は日本人の考えの中には全ての物に心があり，神が宿るとゆう汎神論の存在を主張された。そしてこれにもとづいて，I.D.の今後のあり方を示唆した。

せんじつめれば物を大切にしなければならないことを説いた教授の話は，I.D.の一部の欠陥——巧利性や経済性に偏つたもの，企業の利潤追求のみに奉仕させられた場合，製品のボロ隠しといわれるような見せかけの仕事——を無くするための心のもち方を示すものとして，私は共感する所が多かった。これに対し，ある一流新聞が「神がかり」ときめつけ，デザイン会議には反省が見られないと批判的な所説を載せているのは，私には会議全体

を正しく捉えていないものとして納得できない。

機器や家具を道具として捉らえ，道具は環境との調和によって機能を全うするとゆうのが一般の通念となっている。併し，こうゆう考え方では道具と環境の調和は得られない。何故なら，道具は全環境の中で機能すると同時に，道具は環境の一部を（時には大部を）形成するからである。道具のない環境というのは，生のままの自然環境であって，我々が生活する社会では，道具のない環境などあり得ない。例えば都市の中の自動車，室内における家具は環境そのものであるとゆう考えに立ってこそ，環境問題を解決し得るのであってこうしたトータル的な考えは今までない訳ではないが，Ｉ．Ｄ．やインテリヤーのデザイナーと企業に徹底させることが必要だろう。

物を大事にすることは環境を大事にすることに通じる訳で，デザイン会議の基調講演も，神々の意にそむかないようにするとゆうことは環境の本来的なあり方を素直に受けいれることを意味していると受け取れた。

デザイン会議の最終日に，福祉の分科会に出席した所，ここではリハビリテーションの問題が真剣に論じられた日頃，こうした方面に接していない私には大変な驚きであると同時に，地道な研究に熱情をそそいでいる人達に対し，深く敬意を表する次第です。自分の周囲を身廻す時，余りにも事情が大きすぎるのに困惑しています。

公害の元祖のようにいわれている工業製品，その片棒をかつぐＩ．Ｄ．デザイナー，世間の冷たい目が注がれている現在，工業製品なくしては一日も過せない重要な役割を荷うことに，自信をもって仕事に取組もうではありませんか。

京都の秋

光藤俊夫

久し振りに秋の京都を訪れた。

京都は私の学生時代の街である。

懐しい街ではあるけれど，記憶としては決して詳しい街ではない。何年もここにいて勉強したところだし，京都の友人を沢山知ってはいる。しかし判り易い筈のあの碁盤目が，かえって同し通りにみえて仲々身につかなかったし，京都弁の妙に甘ったるいところが馴じめづ，ついには心中しても良いなどと思うほどの女性にもめぐり逢えなかった。東京にやって来て20年，生まれたところである大阪も今や迂遠になってしまったが，京都は尚更，私にとってすでに他国としか言いようがない。

世界インダストリアルデザイン会議が始めてアジアの，そして日本で開催されることになって，その地が京都に選ばれたことは，誰が考えても順当であり，正解である。時まさに秋，言うことはない。

参加した人たちは2,000人を越し，そのうちの４分の１が諸外国の方々であったと言う。そして又そのうちのおそらく大半が始めて日本の京都を訪れたことになるだろう。

１日目が晴れ，２日目が曇り，３日目がしとしと雨から雷が鳴り，終幕が土砂降り，うつろい易いわが国の，この季節における気象状況などもとりまぜ体験していただこうという天からの配慮と併せ，この会期中に，彼等は一体日本の古都をどのように眺めていっただろう。はなはだ興味のある問題だ。

始めて訪ねる外国の街の，何ともの珍らしいことか。そしてそれが古い歴史に支えられて成り立った所ほど感懐も大きい。私もかって始めてヨーロッパに旅をして，ローマの土を踏んだ時には，決して嘘でなく感涙（？）にむせんだものだ。だから多分彼等も，と思うのは早計かも知れない。しかし折角この街の，そして日本の良いところを沢山掴みとって帰ってくれたのなら幸だ。

もちろん「良ろしくない」ところも方々に散見する。しかしだからこそ，このようなテーマで，こんな会議がもたれるのだということの確認程度の記憶でしかお土産にならなかったことを念じたい。

そして「良ろしくない」ところは，今回の会議の成果をふまえ，大いそぎであらためれば良い。

東京の人に案内して貰うといった今回の京都で，古いしきたりや昔の器物，町屋のたたずまいや，そこでの昔ながらの暮らしを改めてかいまみることの出来た私は，とうの昔に知ってはいても，とうとう馴じめづにいた。そんないろいろなものの中に，かなり価値ある「人の心」と「物の世界」の意外なむすびつきや，「物の心」と「人の世界」の確固としたかかわりあいのあることについて再発見するという，思いがけぬ収獲があったりして，実を言うと，まるで始めて行ったアチラの街でのような，何となくわくわくした気持で京都を楽しんだのだ。

京都の街をほっつき歩くばかりで，まじめな聴講生でなかったわけではない。むしろ誰よりも熱心な参加者であったと自負するし（証拠写真もチャンとある），だからいささかシンドカッタというのが本音である。

ともあれ，それでいて尚，こんなさわやかな京都の秋は始めてだったと言えるのだから，帰りの最終新幹線に乗り遅れたぐらい，どうということはない。

“力”の再認識

山口勇次郎

僕には“デザイン会議”の一日一日が実に楽しかった。会議での講演のどれもが何かを僕に教えてくれたし，分科会での討論の些細な言葉さえ，僕を刺戟してくれた。いつもなら聞き流す言葉だったかも知れない。そんな言葉が，それ程どうして僕につきささってくるのか，それは僕自身の空虚な中身を充してくれた事だけではあるが，僕には満足だったのである。

たしかに一部ではデザイン会議について批判も聞かれるが，20年前に集ったデザイナーの数と今日の数とを比較するまでもなく，一般化されたデザインに対して，それがお祭りと云われても，打上げるものが出来たことが，次の時代にとって大切なのだと考えると，それだけで楽しくなるのである。

僕が友人を通して外国人と話したことや，隣人である韓国の人とも交流も楽しさを増した一因であった。特に韓国の代表は僕と同じ京城公立中学校の卒業生だった事も幸いして，いろいろと心あたたまるものがあった。

この会議では，同じデザイナーの仲間として当協会の会員が多数裏方となって会議をもり立てる役割を果していた事を忘れてはならない。

TOKYO MAP を作った白石，坂田，島崎，加藤（帛子）さん達が会場でも，シャツにアイロンでデザインイヤーのシンボルマークを転写して販売協力していたのも，夜，外人案内をして少しでも日本の印象を，そしてお互いのデザイナーとしての交りを深めていたことも，会社の迎賓館を開放して夜の交歓場をつくってくれた川崎さんの努力などすべて頭の下る事だった。その一つ一つがデザイナーの言葉であろう。

車公害に対して，自転車を一千台配備して自力でホテルから会場へ，会場から観光地や職人のいる町へと運ぶことを考えた企画は大成功だった。外人も加えて，みんな楽しく自転車に乗った。

僕も若い人達と会場から三千院までの坂道を乗ってみた。こんなすばらしい思い出を作ってくれた企画に感謝する。坂道は，どんな些細な傾斜であっても力を要求する。その苛酷なまでのエネルギー消費は，僕にすばらしい満足感を味あわしてくれた。自転車は坂道を更めて教えてくれたのであり，それを乗り切るエネルギーを考え直さしてくれたのである。

最終日の雨の会場での阿波踊りやゴーゴーダンス，爆発するエネルギーのすばらしさ，デザイナー達の明日えの活気がそこにあった。

デザイン会議は僕にとって良い意味での“力”の再認識であった。

デザイン会議が残したもの

渡辺　優

デザインとは何か？　デザイナーに何ができるか？　という疑問に対する解答は大変困難なように思われる。とくに今日の世界の価値観の混乱は，その問題を絶望的なところに追い込んでいるようにも見える。今回の会議もその混乱をあらためて意識させられるような内容が多かったように思う。

何があったか？　ということになると終ってしまえば何もなかったのと同じかもしれない。ただ世界から集った人たちが互いに微笑みあったり，握手したりしただけだったかもしれない。しかし少なくとも“行なわれた”という記録だけは確かなことで，デザイナーたちが「何かを求めた」ことも残って行くだろう。

“人の心と物の世界”というテーマは言葉としての魅力はあるが，会議としてはつかみどころがないむづかしさがあった。心とか神とかという言葉が出てくる日本人同志は何となく解ったような顔をしても，外国の人たちには全く異なった受けとり方をされていた場面もあった。

印象に残ったことは，会議場の建物と周囲の山々との対比の風景……いささか力みすぎのデザインの建築に対して，京都の山々には少しも気張ったところがない。

〔アイウエオ順〕

別紙よりつづく

会員の移動

大橋正介　P15
（自宅）藤沢市藤沢石名坂6188—270
〒251

垂見健三　P44
事務所開設
東京都千代田区二番町1—2　〒102
番町ハイム536　(03) 261—6770

森本敏弘　P69
（自宅）兵庫県川西市新田城山320
〒666-01

トーソ（株）販売企画課　P108
東京都中央区新川1—4—9
(03) 552—1211　〒104

共同通信工業（株）　P102
東京都千代田区内神田2—16—13
（神田ビル）(03) 254—1261　〒101

小林隆志　P88
（自宅）東京都杉並区荻窪4—26—10
カーサヴェルデマンション401
(03) 391—5682　〒167

準会員　織田武巳氏（P84）は米倉と改姓されました。

第4回目を迎える研究発表会

研究委員会　秋山修治

当協会が69年に社団法人の資格を得てから，事業計画の一環として，70年2月末に第1回目の研究発表会を開催してから早5年になる。その間71年度の休回を除いて，今回で4回目の研究発表会となる。

これまで3回の間に延44名の発表者が，多くの意義ある研究成果を発表され，デザイン界に産業界の資質の向上と，相互理解の為に寄与してきた。そしてその成果も各方面から注目を集めている。

これは，会員各位の，インテリアデザインとは何か。又どうあるべきかという，たゆみない研究と努力の結果である。

このような意義ある研究会をもっと，価値を高め，インテリアデザインの有用性や職域，職能の確立の為に継続して行くべきであろう。

しかし研究会が，広く社会にその存在を示す反面，その運営上の問題や，内容等についてもいくつかの指適を受けている。

そのうち会員からのいくつかの指適を上げると，

1. 研究発表会が，東京でのみ行われる為，他の地域の会員が参加出来ない。
2. 研究発表会の内容が，全会員に報道されない。
3. 発表会体に主張がない事。

等が言われている。

1については，運営上の問題や，今後の開催方法の検討を要するところである。現在東京のみで行なっている点については，一般参加者の動員や，会員の65％が，東京及その周辺にいる事等が主な要因であると思われるが，今後については何回かに1回は，支部所在地で開催する事等，検討を要する。

2については，研究発表会当日参加者に配布している，要旨録を事務局へ申し込めば，実費で配布している。この要旨録については，費用の面から，全会員に配布する量を印刷していない。

3については，まだこの研究発表会が会員の中に完全に定着したとは言えない面を持っている事や，発表者申込者が全体的に少なく，テーマ設定なり，年度方針等を設定出来る状態でない為に起る問題であろう。

1及び2の問題については技術的なものを解決すれば可能であると思われる。しかし3の問題については，協会そのものの体質や，会員相互の深い理解を要するし，又回を重ねる事により，出来上るものである。

以上過去の研究発表会の経過と研究発表会へのいくつかの指適である。

4回目を迎える今日の社会背景は，エネルギー危機を始めとし，色々な問題が表面化している。この様な時期にこそ，デザインの有用性と社会的役割，生活環境の総合化等，なすべき事の必要な時である。又資源の合理的な活用と，豊かな社会へのビジョンを提示し，デザインの本来の姿を表現しなければならない。

この機会に会員の貴重な体験と，研究成果を広く社会に発表し，インテリアデザイン界躍進の為の基礎にする為にも皆さんの発表参加を必要とします。

編　集　後　記

■明けましておめでとうございます。会員皆様の益々の御健勝と御発展を委員一同祈念いたしております。

さて，昨年末にはじまる異常な程の世の動き，委員会活動にもやや動きにくさがでてきたともいえようか。ごらんの通りのページ数の削減と体裁の一部手直しなど。よろしく，御諒解をお願いいたします。

■さりとて，協会の活動こそ，まさに全協会的連帯を通して，おたがいにふれ合いの場としても行動してゆくべき事態ともいえるのではないでしょうか。

モノ不足・エネルギー資源の有限よりも，確たる理念不足，人間相互の信頼感の欠如とか云々される昨今，しかし大言壮語を好むわけではないのですが，じっくりと三省してみたい。

■閑活休題，ポルノ解禁いや引きしめだ，統制だ。こんな風潮に一喜一憂？ああ，ムザンにも過去の統制・配給の言葉が踊りはじめたのも今日この頃。

買占め，売りおしみなんとなく古風な，といえば，火ばち，れんたん，マキストーブ，あんかなどなど成長率ゼロからなつかしき時代への回帰。

■古き時代への回帰もまたよし。人間回帰もまたよし。本年も，また，平凡なくり返しにこそ新しい何かがあるのか。その何かに期待しながら（尾上）

機関誌・JID　No.63　定価 200 円
昭和49年2月発行　印刷　広洋印刷（株）
発行所　社団法人 日本インテリアデザイナー協会
(〒150)東京都渋谷区神宮前2—3—16建築家会館3F
振替・東京・76389番　電話（03）403—3649
The Japan Interior Designers' Association
発行人・白石勝彦　編集　社団法人　日本インテリアデザイナー協会　会報委員会
担当理事 川上信二・川崎浩
委員長（関東）尾上孝一●三宅征郎・加藤帛子・光藤俊夫・高田紀久枝・山岸征史・泉修二
（関西）本田安治●柏原秀夫　長谷川由紀子
（中部）林寅正●八代美代子・若園晃・宇賀敏雄・安藤清
（九州）白川雄渾・香川寿一
JAA-Bldg., 3-16, 2-chome, Jingumae Shibuya-ku, Tokyo, Japan.

禁　転　載